

与謝野晶子歌帖「泉の壺」の背景

——歌集『火の鳥』所収歌との関係——

宮 本 正 章

一

与謝野晶子の第十六番めの歌集に『火の鳥』と名づけられたものがある。講談社版『定本与謝野晶子全集』第四巻 歌集四の「解説」に言うように、この題名は、

物云へば今も昔も淋しげに見らるる人の抱く火の鳥

によるものであろう。大正六年から八年にかけて詠まれた短歌五五九首が収められていて、晶子三十九歳から四十一歳に至る歳月の間のおりおりの詠を集めたものである。アウギュスト・ロダンの死に寄せた感懐や、六甲山や耶馬溪の旅での想い、『みだれ髪』の系譜につながる恋の歌、病む子に寄せる心情等が歌われているが、その中に「小林氏令嬢の舞を観て」の詞書を持つ七首の短歌がある。今、ここに掲げてみる。

与謝野晶子歌帖「泉の壺」の背景

少女子がゆたかに袖をかへす時むらさきの雲立つと思ひぬ
408

(以下七首小林氏令嬢の舞を観て)

夏の花すべてなびきぬ美しくき舞台の君の面てづかひに
409

青海波金に摺りたる袴してわたどのに立つわが舞の仕手
410

曲今し起らんとして静かなり千人を前に置けるわが仕手
411

鼓よしいみじく清き狸々が波の上をばゆらゆらと行く
412

この少女月の中より舞ひ来るや清き光を四方に投ぐなり
413

楽しとは浪華に來り今日知りぬ君が少女の舞ひ給ふため
414

(通し番号は前掲の全集の脚注に付すもの)

「小林氏令嬢」とは、与謝野寛・晶子夫妻の友人小林政治の三女迪子のことである。大正六年五月彼女の青海波の舞を見たおりの感動を詠んだのが右の七首であるが、まず、寛・晶子夫妻の西下と、苦楽園滞在について語ることにする。

与謝野晶子がこれらの短歌を詠んだ当時、小林政治は、大阪市東区備後町四丁目心齋橋角で「毛布肩掛絨裁縫品 卸商 小林政治商店」を経営していた。明治十年七月二十七日生れであるから、当時四十一歳であった。

小林政治が与謝野寛・晶子夫妻を大阪駅頭に迎えたのは、大正六年五月二十八日であった。『大阪毎日新聞』は、その時の有様を次のように報じた。

西遊せる与謝野夫妻愛児オウギュストを連れて

与謝野寛氏並に夫人晶子は今回久方振の西遊を思立ち四男オウギュスト（五つ）を連れて二十八日午後八時二十五分梅田着来阪当地の友人小林政治夫妻、高安博士夫人その他の出迎へを受け東区南久宝寺町四丁目の小林氏邸に投ぜり。夫妻は同家に一泊の上向ふ二週間ばかり六甲苦楽園に滞在一般同好者のため揮毫の需めに応ずべしといふ。与謝野氏は曰く「一昨年佛蘭西から帰つて以来（大正二年一月帰朝の誤り）始めて当地へ参つたのですが、私も長らく病氣をしてやつと癒つたばかりの身体ですから当分は氣保養のため静かな山中に引籠つてホンの同好者だけに歌の揮毫をやつて見る考へです。東京では学校の方を廢して只今は辞書や何か

の編纂に没頭しておりますが今後はヤハリ詩によって立つ考へで居ります。又晶子夫人は「私など当地が生れ故郷と申してもいゝ位ですが今後は久し振りにゆつくり大阪を研究して見たいと思つて居ります。宅では子供が大勢なので随分氣骨が折れ何彼と心配が絶えないものですから私も昨今は神経衰弱で困つて居ります好きな著作に親しむ余暇のないのが何よりも残念で御座います」云々。⁽¹⁾

と。与謝野寛・晶子夫妻が新聞記者に答えた「病氣休養」と言うのは、三分は真実であつたろうが、七分の理由は經濟にあつた。この旅行に出る前の大正六年五月十六日付の小林政治宛の手紙は、そのことを物語るものである。少し長くなるが、全文引用してみる。⁽²⁾

啓上

皆様御変りもなく御暮しの事と存じます。小生も全く快氣二復しましたから御安心下さいまし。さて本月廿四日頃に出発して大坂二一週間ほど滞在して（荊妻とアウギュストと三人）久々御地の空氣に觸れたいと思ひます。

就てハ御相談申上げますが私ども二人が短冊、式紙、半折、金幣等の揮毫を滞在中にして参四百円の収入を得て帰るやうな都合二御計画が願はれないでせうか。此事を品好く出来るやうにお世話下さいませんか。高安やす子夫人二も御相談下さいまし。

また薄田君など二御話し下さって各種の新聞に私共の来坂して数日間滞在する旨を書いてお貰ひ下さい。

揮毫の申込所も御迷惑ながら適当な所へお決め下さい。

私もハ何處か便利な郊外にでも滞在したいと考へます。其場所もお考へ下さいませんか。

右ハ甚だ突然ですが御相談申し上げます。思ひ立った時に行きたいとも考へるのですが大兄の御忙しい中二今ハ時季が悪いことお考へになりますなら見合せます。(実ハ荊妻が又々妊娠しましたので五、六両月で無ければ外出が出来かねるのです。来月の五日頃までハ滞在したいと思ひます。

猶揮毫ハ「与謝野寛氏同晶子夫人の来坂を機として二氏の歌を左の規定にて同好二分ちたし」として

短冊 壹円五十銭 式幣 參円

半折 六円乃至八円 全幣 拾円

とでも御定め下されたく候。この揮毫料よろしきやうに御定め下さいまし。猶用紙短冊ハ依頼者の自弁にして置く方が便利でせう。

この発起人ハ薄田君、高安夫人、貴兄の三人に願はれませんか。

十六日

小林大兄 御侍史

艸々

寛

晶子

令夫人様御子様方へよろしく御伝へ被下度候。

右の手紙に見えるように、与謝野夫妻の目的は、染筆料獲得にあつたのである。

寛が発起人として指名した薄田泣菫は、この時、大阪毎日新聞社学芸副部長であつた。ちなみに部長は、家庭小説の第一人者であつた菊池幽芳であつた。泣菫と寛の交遊は明治三十三年八月五日に小林政治(天眠)たちの関西青年文学会例会の講演のために西下した鉄幹を、泣菫が北浜の宿に訪ねて行き、「文学の話に心を温めあつた」ことに始まる。⁽³⁾とは言え、既に鉄幹は、泣菫の第一詩集『暮笛集』(金尾文淵堂、明治三十二年十一月刊)に高い評価を与え、明治三十三年四月に『明星』を創刊するや泣菫の新体詩「夕の歌」を、つづいて、「闇夜樹畔に立ちて」(第二号、明治三十三年五月)を掲載して、泣菫への傾倒ぶりを示していたから、二人は面語以前からお互いに十分理解し合つていたと思われる。鉄幹に会つた八月以降、泣菫は『明星』に次々と新体詩を発表していった。野田宇太郎は泣菫の代表詩の大部分は『明星』に発表され、その間に与謝野夫妻との篤い友情も生まれ、従つて、『明星』廃刊が心理的にも泣菫に少なからぬショックを与えた。終刊号に載せた詩「死の勝利」は『明星』への餞別であつたと言つてゐる。⁽⁴⁾泣菫は明治四十二年一月、『スバル』創刊号に「謎の女」、第二号に「温室」の二つの詩を発表

ただだけで、以後は詩から遠ざかり、小説を試みるが、ほとんど注目されなかつたらしい。このことが彼の新聞社入社につながつて来る。泣菫は帝国新聞社を経て、明治四十五年八月一日、大阪毎日新聞社に入社した。⁽⁵⁾兎に角、寛にとつて泣菫は心許した古い友人であり、土地の新聞の要職にあるのだから、何かと、頼りになる人物であつた。

二人めの発起人として、寛の指名している高安やす子とは、大阪市東区道修町四丁目にあつた高安病院の院長高安道成の夫人であつた。大正六年当時、三十四歳、音楽、絵画、文学を趣味とする「大阪社交界名流第一級」の人であつたといふ。⁽⁷⁾与謝野夫妻との交遊がいつ頃から始まつたのか知らないが、寛はやす子とその夫道成を伝手として、色紙や短冊の希望者を得ようとしたのであつた。ちなみに、この六年五月末から六月上旬の関西滞在中に、与謝野晶子を指導者として、高安やす子等大阪の名流夫人、令嬢たちが、後に紫絃社となる短歌の会をはじめたといふ。⁽⁸⁾

三人めの発起人を依頼された小林政治は、山口吉郎兵衛、小林一三等、かつて寛の渡欧費捻出に協力してくれた大阪財界の人々に連絡して、寛の意を伝え、与謝野夫妻の滞在地在を六甲山麓の苦楽園という新住宅地に定めた。この間の事情を小林政治は、

恰もその頃阪神間の六甲山麓に苦楽園といふ新住宅地が開かれて

居た。経営者の中村翁（大阪毎日の中村喜一郎氏の嚴父）が大隈侯、土方伯等の諸名士をこの山荘に迎へ、文筆人士等をも歓迎して居た折柄なので私はこゝへ与謝野夫妻を此の時紹介したのであつた。

と書いている。⁽⁹⁾一方、中村喜太郎は次のように述べており、二人の内容は一致する。

小林さんとお知り合いになつた最初は、大正二年頃、即ち私の亡父が阪神間の六甲苦楽園を開発し初めた時分と記憶する。元來情誼に厚く、お世話好きの氏が、その頃たしか外遊から帰られ、色々の事情で経済的にも幾分苦しんでゐられた与謝野御夫妻を、苦楽園に紹介され、同じように世話好きで情熱漢であつた小生の亡夫が喜んでお迎えし、与謝野さん夫妻は大分長い間拙宅に滞在され、その間、各方面の依頼に応じて沢山の歌の揮毫もなされた訳である。

と。もう一つ苦楽園について書かれた文章を引用する。これは湯川スミ氏の『苦楽の園』という著に出るものである。⁽¹¹⁾氏が相模工業大学の兼子秀夫理事長夫人雛子氏（一九七六年一月当時）より聞かれたものといふ。

苦楽園という所は、日露戦争直後、大阪の豪商中村伊三郎——雛子さんの実父——が神戸から帰阪の途中、六甲山麓にさしかかる

と、車中の外国人が、

「この附近の景色は美しい。この山の上に家を建てたら良い眺めであろう」

と話し合っているのを聞き、インスピレーションのひらめくのを覚え、六甲山開発に打ち込むことになった。明治四十三年のことである。しかし一番苦労したのは水の問題であった。水が充分なければ何もできない。彼は以前から伏見稻荷を信仰していた。ある夜夢に、白狐がある方向を指して踊るのを見て、その方向を掘らせたところ水脈を見つけ、計画を進めることにしたという。

伊三郎の構想は、明るい健康な社交場、別荘、レクリエーション・センターを計画することであった。

ラジウム温泉を売物にして、ホテルを十、旅館を五つ建て、中村家の住居「久方庵」を中心として、迎賓館を建てた。

伊三郎の呼びかけに答えて東京からは、各宮家をはじめ、土方伯、黒田、大隈重信首相、大阪、兵庫からも知事を始め、各界名士が来住した。

有名人としては九条武子も仮寓し、「天開園」という大邸宅のあとがあり、和歌もいくつか詠んでいる。文士としては与謝野鉄幹・晶子夫妻がある。晶子は鉄幹の外遊費用捻出のため、屏風・短冊・色紙の膨大な量を中村家に残している。また幸田露伴は、

福田貞山（後に苦楽園住人となる。関西画壇の雄、岡倉天心の弟子で師の命により中国各地を遍歴し、その景色を画帖に残している）を紹介したのを始め、横山大観、木村武山など院展の雄が長期滞在した。

関東震災直後谷崎潤一郎の関西居住最初の仮の宿は「菊水」や「万象館」であり、中山太陽堂社長が「太陽園」を建て、森下仁丹も大邸宅を建てた。

俳優の中では、初代中村鴈治郎、先代仁左衛門も住居を定めた。このように苦楽園は明治から昭和初頭にかけて関西の第一級住宅地、現在の軽井沢のごとき観があった。

と。以上から苦楽園は大正二年頃から中村伊三郎が開発した新興住宅地であり、各界の名士富豪によびかけて、彼等の別荘ができ、関西一の高級住宅地になった。小林政治は中村伊三郎に依頼して、その自宅「久方庵」に与謝野一家が滞在できるようにしたことがある。

与謝野寛、晶子、アウギュストの三人は、二十八日の晩は、南久宝寺四丁目の小林家の控宅に一泊して、二十九日に六甲山の苦楽園に移って行った。この折の苦楽園への行程を与謝野迪子は次のように書いて¹²⁾いる。

阪神電車の夙川駅で降りると、山側の方に苦楽園行きの自動車が

待っている。私達はその頃まだ珍しい自動車に乗って、ところどころ岩のむき出ししている、でこぼこ道を進んだ。木々はあまり大きくなく、五月の陽光に山道は乾いてひび割がしていた。間もなく、六甲山の中腹にある苦楽園に着いた。数寄屋風の離れ家が景色のよい場所に点々と建っていて、その一つを与謝野家が借り受けていた。そこに私達も集まって食事などを共にした。

与謝野迪子は、小林迪子が与謝野家の長男光と結婚した後の名である。このとき、小林家の家族六人が苦楽園に与謝野夫妻を訪ねたおりの記憶を後に綴ったものである。この文章は次のように続く。

洋風のホテルや大きな温泉浴場、また園主の中村家の母屋が遠く近く散在していた。

ホテルには山田耕作さんが泊っておられ、夕方、与謝野家の人達とホテルへ行った時、広間の灯を暗くして、ピアノの燭台にろうそくをともし、ピアノを聞かせてくださった。静かな山の夜にその即興曲はロマンティックな余韻を残し、私達を魅了した。そして、私達姉妹は、その瀟洒な山田耕作さんの紳士ぶりに燕の紳士とあだ名をつけ、いつまでも噂した。

鉄幹・晶子夫妻の滞在した頃の苦楽園は、自然があふれているとともに、ハイカラ趣味の先端の住宅地でもあったのである。

こうした環境の中で、寛、晶子の二人は、毎日、二枚折屏風、歌

帖、半折、色紙、短冊等多数の揮毫を続けたという。(13) 依頼者はさきの山口吉郎兵衛や小林二三、高安道成の紹介による人々であった。ときには、小林二三は夫妻を宝塚歌劇に招待し歌劇学校の生徒やスターであった高峰妙子、雲井浪子、由良道子、篠原浅茅、大江文字達をこの高名な歌人夫妻にひき合わせたりした。(14)

苦楽園滞在中に晶子が詠んだ歌は次のようなものであった。(15)

わが立てるみどりの山と大海の浅黄をつなく白き道かな 95

昨夜の花をとひの花露に濡れあしたにそよぐ月見草かな 82

わが寝ぬる山より出づる朝の雲うすものよりもなやかに見ゆ 83

遠近の水の音より夏の夜に白く明けたる山の家かな 84

津の国の武庫の郡に濃くうすく森ひろごりて海に霧降る 85

わが柩つくくらん岩も恋人と居てものを云ふ岩もある山 87

山映る石の湯槽にある人も子の思はれてわりなかりけれ 90

夕ぐれの浅水色の浴室にあればわが身を月かぞと思ふ 92

武庫山の夜の風の音その中に子を思ふ人あはれにも寝る 100

これらの歌の初出は、『大阪毎日』『婦人画報』に大正六年六月、七月に発表されたものである。苦楽園から眺める自然のたたずまいに美を感じている歌、『みだれ髪』につながる恋の歌、ナルシズムの歌、残してきた子への思慕を訴える歌である。『みだれ髪』となり、それらは概して、平淡に詠まれている。

苦楽園滞在中、大阪にも出、故郷の堺も訪ねたらしい。⁽¹⁶⁾

一心寺石塚とけより白ければ骨位をいと悲しとぞ思ふ

金堂も五重の塔も人ならば見がたききは少女ならまし

物思ふ和泉式部の籠るやと金堂のぞく天王寺かな

天王寺金堂を見て西門を出づる心地は今もめでたし

ちなみに一心寺は天王寺公園に隣接する庶民信仰の寺院である。

その寺の北西に隣接するように四天王寺の広大な境内が広がっている。やはり大阪人に愛される寺である。その寺の西門の石の鳥居は極楽の東門と言われている。103の歌はその門を出るおりの安らかな心が、昔堺の母や姉と共に参ったおりに体験したものと同じであると言うものであろう。ちなみに、天王寺から阪和線に乗れば、小一時間で堺である。

親ありし日所思ひつ、故郷の和泉国に一夜寝にけり(旅中にて) 102

堺の父鳳宗七は明治三十六年、母津祢は四十年に死去し、今は三代目宗七を名乗る弟籌三郎の代である。一泊して、「仲良しの籌さん」とありし日の父母のことを語り合ったときの歌であらうか。

揮毫、小旅行、その間に既に書いた高安やす子等の歌会が持たれたのであろう。集うたのは、関口冬子、丹羽安喜子、清瀬比那子、結城千代子といった名流夫人たちであったと思われる。これ

が前にふれたごとく、紫絃社という寛、晶子の添削を受ける歌の集まりに発展していくのである。⁽¹⁸⁾

さて、次に『火の鳥』の小林迪子を詠んだ短歌の成立と、晶子歌帖「泉の壺」の生まれる経緯について、語ろうと思う。

二

与謝野夫妻が小林迪子の舞いを観賞したのは、大正六年六月十日であったらしい。

迪子は明治三十九年三月二十一日生まれであったから、当時、満十一歳二月月であった。大阪南地の明月楼で、彼女の能楽の師、大江又三郎の還暦の祝いの会があり、観世流舞囃子「乱」を舞ったのであった。⁽¹⁹⁾舞囃子とは、『大辞林』によると、「能の略式演奏の一。一曲の主要部分(舞事を含む)を、面・装束をつけず、紋服・袴または袴のまま、シテと地謡と囃子とによって演ずるもの。↓居囃子」⁽²⁰⁾とある。迪子は五歳から京都の大江又三郎の門に入り、この十二歳まで、仕舞を習っていたのである。

このおりの事を迪子は次のように書いている。少し長くなるがこの日の雰囲気をよく伝えているので、引用することにする。

その日会場の楽屋で、母は私を膝前に座らせ化粧をしてくれた。母の顔が上気して、その吐く息が生暖かく私の頬をかすめる。ま

つ白な練白粉を水で溶いて、生ぶ毛のままの私の顔に塗り牡丹ば

けで仕上げをして、眉毛や睫に付いたお白粉をとり、唇に京紅を薄くさした。頬紅をとすめた人に丁寧に断つて、お下げ髪をな

でつけてくれた。着物は淡い青磁色の中振り紋付き、胸元を合わせる前に内ぶとこに薄い小布団を入れ、細幅の織物の帯を締め袴をはく。袴の紐は最後に男の人に頼み前に十文字に結んで貰った。濃ゆい臙脂色の塩瀬の袴には、裾の方に青海波が金箔で置かれ、大小の桐、梅、牡丹、椿、あやめ、萩の花丸が散らし染めにな

っている。観世流舞囃子「乱」専用の「百草」の扇子を袴の紐の左側にさし、前の人の舞台が終るのを待った。お囃子の終りの

笛が好まり終る頃には、相当頭に血がのぼる。けれどもしばらくして、金屏風の裏を通して舞台に出ると、もう心が静かだった。

五つから十二のその日まで習っていた仕舞とはいえ、狸々が波の上を渡って行く足運びが、足のつま先まで青海波を描いてゆくような足捌きが、今までにない初めてのもので少し緊張はしたものの、謡に合はせ囃子に合はせ、すべてを忘れて、淡々とただひたむきに舞った。

「六甲山」【思ひ出】⁽²¹⁾所収

与謝野迪子の舞姿は、彼女の著書の口絵写真に出ており、長いたもとの着物に袴を着け、扇子を手にした少女の立ち姿は、誠にりり

しく見える。

迪子の舞いを見た与謝野晶子は、その印象を歌に詠んだ。しかし、それを小林政治に示さないまま、六月十三日に岡山へ向かった。和氣に住む正宗白鳥の弟で、国文学者正宗敦夫を訪ねるためであった⁽²²⁾。正宗邸で一泊、十四日、下関から九州に入り、十五日は若松市に入り、六月十五日の夕方、講演会に臨んだ。このおりにしたためられた小林政治宛の手紙に、迪子の舞いを詠んだ歌がみられる⁽²³⁾。

東京が恋しいのでございますか 大阪に心が残るのでございませうか。九州のさかながおほあちなのでございませうか。私は海をわたりましてから一つのごはんを頂くことが苦痛なほどになりました。それにあまりに忙しいのでございます。今日は寺で講演会がございまして私はいさつを(たゞそれだけです)すませてひかへしつへきて居ります。寛の声が本堂でいたします。この間に二枚よりない紙へ手紙をか、うとするのでございます。まあかきなくなるとこまりましたからうたをさきにかきます。

青海波金に摺りたる袴してわたどのに立つわが舞のして。曲今し起らむとしてしづかなり千人を前におけるわがして。

小なれど芸はかしこしひざまづく千万人におのれ代りて。鼓よしいみじくきよき狸々が波の上をばゆらくとゆく。

初夏や鼓と笛を父母になして舞ふ子ををにもちてまし。

このしてをた、ふることもつ人は金の字をしてかけてと掟て
む

まへによみましたので覚えて居りますのは

たのしとは浪華にきたり今日しりぬ君が少女の舞ひ給ふため

つねの日は后がねとも云ひぬべし舞の舞台の若きおほきみ

夏の花なべてながきぬうつくしき舞台の君の面づかひに

少女子が舞の袂をかへす時紫の雲立つとおもひぬ

少女子が舞のおもてにかざさる、金の扉とわれもならまし

などでございます 六甲山にはたしかに草稿がございます。えん

ぜつがすみました。奥様よろしく。

はやくかへりたいと思いますが二十四日くらるになるでせうか。

この晶子の歌を読んだ小林政治は、記念にこれを歌帖に仕立てよ
うと思った。その表紙は「その時迪子の袴に用ゐた塩瀬の友禅切で
作った⁽²⁴⁾」と記している。これを晶子へ送って染筆を請うことにした。

歌帖は大正七年七月十四日に晶子の手許へ届けられた。⁽²⁵⁾

東京の親戚の不幸で上京していた小林は急遽十四日に、大阪へ帰
った。寛、晶子を訪う暇もなかったらしい。小林の帰阪するのを知
った晶子は、汽車の時刻を見はからって、東京駅まで行ったが、会
えないまま帰って来た。その晩、宮本富士一が小林の手紙や贈り物、
歌帖などを持参した。宮本は此君庵と号した浪華青年文学会（関西

青年文学会）時代からの小林の友人であつて、この頃は、小林が中
心になって創立した出版社天祐社の支配人として、福井の税務署長
を退職して、東京に来ていた。

十四日付の小林政治宛の手紙で、晶子は、

その夕宮本様おいで下されお手紙拝し申候。賜物もかたじけなく

存じ申候。うつくしき書帖のおもてにかの日のにほひたゞよふ

こ、ちいたしなつかしさ限りなく覚え申候。二三日のうちにさし

出し申すべく候。

と書いている。完成した歌帖が小林にいつ届けられたかはわからな

い。そこには十三首の歌が記されていた。六月十五日の若松からの

晶子の書簡では十一首であつたから、二首増加したことになる。小

林の希望通り「泉の壺」と題目が書かれ、詞書の形で次の文章が綴
られていた。⁽²⁶⁾

大正の六年水無月十日浪華の地にて小林迪子の君師の御賀に乱の

曲を舞ひ給ふよそほひは翡翠の上衣に濃き色の袴なり

増えている二首は、次のような歌であつた。

目にちかく神達の世を見せしめて幼き君のまひたまふかな

なにはちちにさくや木の花うるはしき少女のまひと思ひぬるかな

大正八年八月十五日に金尾文淵堂より刊行された『火の鳥』の七
首は、この「泉の壺」の十三首のうちから、六首拾い、表記を少々

変えたり、表現を少し改めたりしている。たとえば、「泉の壺」の、たのしとはなにはにきたりけふしりぬ清き少女のまひたまふため

が、
 楽しとは浪華に來り今日知りぬ君が少女の舞ひ給ふため

となつている如きである。

『火の鳥』のみに見える一首は、

この少女月の中より舞ひ來るや清き光を四方に投ぐなり

である。これらの歌の中の、

初夏や鼓と笛を父母になしてまふ子を子にもちてまし

の一首は、この年から十一年後の昭和三年四月、寛、晶子の長男光と迪子が結婚したことによつて事実となつた。迪子は晶子を母とよぶことになつたのである。ちなみに、迪子の結婚は父の政治が与謝野夫妻に申し込んだのであつたという。迪子は次のように書いてゐる。⁽²⁷⁾

後に知つたことだけれど、この年の初めに（大正十五年初頭のころ——筆者注）父は、与謝野の家を訪ねて上京し、光の卒業を期に娘を買つて欲しいと義父母に申し入れていたのだった。——それを知つたのは結婚後二十余年たつてからだった。義父は光が卒業間もなく、若すぎることを理由に、一応申し出を断つたが、その後光がそのことを知り、話を戻して欲しいと義母に申し出たの

で、義母と父の間に一、二度手紙のやりとりがあつた。

と。小林政治は迪子を詠んだ晶子の上の歌が常に頭にあつて、聡明で美しい娘となつた迪子を晶子の長男に嫁がせようと思つたのではなかつたか。迪子は同志社大学英文学科の三年在学中に、慶応大学医学部助手の光の妻となつた。

晶子歌帖『泉の壺』は、現在、京都府総合資料館に入っている。

『小林天眼文庫展 与謝野晶子・鉄幹と浪漫派の人々』（京都府立総合資料館編 平成五年二月）に載せた写真を見ると、その表紙は、あざやかな臙脂色の地に、桔梗、萩、菊、百合の花模様 scatter があり、中央の象牙色の題簽に、晶子の筆で「泉の壺」と書かれています。誠に美しい折本である。この歌帖をめぐる人々は、今は誰ひとりとしてこの世にいない。

注

- (1) 『毛布五十年』小林政治 昭和十九年六月五日 所収。
- (2) 『天眠文庫蔵 與謝野寛 晶子書簡集』植田安也子、逸見久美編 八木書店 昭和五八年六月七日。
- (3) 『公孫樹下にたちて』薄田泣菫評伝▽ 永田書房 昭和五十六年三月十五日。
- (4) (3) に同じ。
- (5) 『土井晩翠 薄田泣菫 蒲原有明集』明治文学全集 58 一九八九年二月二十日。

- (7) 『船場通信』秋季特輯号 昭和五十一年一月一日。
- (8) 「紫紋社とその同人」小林天眠『雲珠』第四卷 昭和三十三年三月一日。
- (9) (1) に同じ。
- (10) 「天眠小林さんの思い出」中村喜一郎『雲珠』十・十一月合併号 昭和三十三年十二月一日。
- (11) 『苦楽の園』湯川スミ 講談社 一九八九年一〇月二〇日。
- (12) 『思い出』与謝野迪子 中央公論事業出版 昭和四十九年五月二十八日。
- (13) (1) に同じ。
- (14) (12) に同じ。
- (15) 『定本与謝野晶子全集』第四卷 歌集四 講談社 昭和五十五年十月十日。
- (16) (15) に同じ。
- (17) (15) に同じ。
- (18) 「紫紋社のこと」植田あや子『雲珠』第四卷。
- (19) (1) に同じ。
- (20) 『大辞林』三省堂 一九八八年一月三日。
- (21) (12) に同じ。
- (22) 「九州旅行の印象」『定本与謝野晶子全集』第十六卷 評論感想集三 講談社 昭和二十五年七月十日。
- (23) (2) に同じ。
- (24) (1) に同じ。
- (25) (2) に同じ。
- (26) (1) に同じ。
- (27) (12) に同じ。